
勇者アルスくんの冒険

八草 賴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者アルスくんの冒険

【Zコード】

N7371Y

【作者名】

八草 賴

【あらすじ】

それはアルスが十六歳になる誕生日の事でした。お母さんは言います。「アルス、私は今日この日のためにあなたをゆうかんな男の娘として育てたつもりです」「娘違う！男の子だからね僕！」お城の王様は言います。「アルスが次のレベルになるには、3600ゴールド必要じゃ」「お金取るのかあ……。すごいなあ、汚いおつさんだなあ」アルスは見事魔王を倒せるのでしょうか。軽く読めて笑えるものを目指しています。

旅立ちの日

それはアルスが十六歳になる誕生日の事でした。

「おきなさい、おきなさい、わたしのかわいいアルスや……」

「ふはあッ！ じつくに起きしるよ！ 鼻と口磨ぐのやめてー。」

「おきなさい、永久の眠りから」

「まだ死んでないよ！ 死にかけたけど！ 殺されかけたけど！」

「今日はあなたにひとつとっても大切な日です」

「ええ？ 何の日なの」

「今日は十五年前お母さんが処女を喪失した日です」

「知らなによ！ なんか生々しこからそいつのやめてよー。」

「まさか一発ではらむなんて……」

「いやいや、それだとなんかおかしくないかな時期的！」……

「はつー！ 今のは聞かなかつた」とこしてー。」

「もう遅い！ いろいろ怖いよ朝からー。」

アルスはいきなり下ネタかよと先行きが不安になりました。私も

不安です。

「ところのは冗談で、今日はあなたがお城に行く日です。私は今日この日のためにあなたをゆうかんな男の娘として育てたつもりです」

「娘？ 僕男の子だけど」

「そのせいいかかなりショタつぽく育ちましたね。ちなみに魔王はふたりが苦手です」

「困ったなあ、姉ちゃんがなにを言ひしるかわからぬいぞ。あとでググってみよう」

「それには及びませんよ。それはつまつじつこうじとでも……『二三』」

母はアルスに教育をほどこします。彼女はアルスの疑問をすぐによく解決してくれる、素晴らしい母親なのです。

「な、なんだよそれ！ そんなの普通苦手でしょー！ 好きなのは一部の変な嗜好の人だけじゃないのー！」

「アルス、お父さんの悪口を言ひやめなさいー！」

「ええーー！ 怒られたーー？ と、父さんがまさか……、どうこういとーー？」

「そんなことは決してないからお城に行つてしまなさいー！」

母は急に怒り出しました。まるで嫌な想い出があったかのようでした。

す。

「ビビりでもよくなじつてー。すゞにひつかかってるよ、喉に小骨が！　いや、アンカーぶちこまれた気分だよ！　そのままじゅびにも行けないよー！」

「しょうがないわねえ……。じゃ、ちゃんと行って来たらアレア買つてあげるから」

「え？　ほんとー…？　うわーい、やったあ！　じゃこいつできまーす！」

「王様こちやんとあこせつするんですよ~」

ソウシテアルスは意氣揚々とお城に向かいました。

旅立ちの日（後書き）

「まかこシツ」「まなじ」でお願いします。このお話は「じつことつこと」です。

王様に会いました

お城にやつてきたアルスを王様が迎えます。

「ようぞきた！ ゆうかんなるアレルのむす」スマシヨー。」

「王様、僕はアルスといいます。そんな握つたりさらしたり巻いたりするやつじやありません」

「ゆうかんな勇者であつた父の後を継ぎ旅に出たいといつそなたの気持ち、しかと受け取つたぞ！」

「いえ、父さんはふたなり好きの変態だといつことがわざと判明しました。それに僕はＰＳＰでモン　ンをやる予定なので旅には出ません」

アルスはそう言いましたが王様はまったく聞く耳持ちません。ちよつと横文字が入るとてんでダメなのです。

僕も大人だし、しょうがない付き合つてあげよう、とアルスは老人ホームページに手伝いにやつてきた中学生のような気分で相手をすることにしました。

「見事魔王を倒したあかつきには、わが娘ミリア、三十八歳独身をおぬしの妻とする事を許そづ」

「いえ、許さなくていいです。そこは禁止のままにしておいてください」

「まあそつ恥ずかしがるでない。の//コア」

王様の隣ではメガネをかけたブタさんが、生意氣にも服を着ていました。

「えー、まあこの際文句は言わないけどおー、まだ子供じやん？
背も全然低いしー」

「よかつたー、子供で」

「まあパパがどうしてもって言つなら考えなくもないけどー？」

「王様、僕のことは気にしないでください」

「//コア、こどものこづけじゃー。」

「やめろジジイ！」

娘に頭を下げる王様に、温厚なアルスも声を荒げます。ですが許してあげてください。彼にも人生というものがあります。

「これー、王様に対してもその口の聞き方はなんだ！」

そこには大臣がやってきました。

「あ、「やめんなさい」と……。やっぱり人生がかかつてくると熱くなってしまって」

「//コア様など畏れ多い。代わりにわたしの娘ローラをやめりつ。

ローラ、来い！」

呼ばれて出てきたのは長身の女性。かなりの美女です。

「僕、やります。魔王をひねりつぶします」

「ちづかそつか。ローラは男だがこの際問題ないだろ？」

「やつぱナシの方向でお願いします」

アルスは父と違ったつてノーマルです。ただしどちらかというと口リ顔で貪乳、ツインテールにニーソックスは鉄板だと思っています。

それにツンデレが大好物です。自分はMだと公言してはばかりません。そんな彼が、果たして本当に勇者になれるのでしょうか。

王様のおへつもの

「わしからの贈り物じや、そなたの横にある宝の箱を取るがよ」
たしかにアルスの横には不自然に宝箱が転がっていました。

アルスは宝箱を拾い上げます。ですが宝箱にはカギがかかっていました。アルスは宝箱を投げ捨てました。

「こりぬと申すか。ならその代わりにひのきのぼうと//コア、もしくはドラゴンキラーのどちらかをやひつ」

「……うーん、悩むなあ」

アルスは一秒で答えが決まつていましたが、悩むそぶりを見せます。彼はほんとうに賢い子です。

「//リは涙をのんでドラゴンキラーにします」

「//コアを捨ててまで魔王を倒す力を欲するところのじやな。……
うむ、その心意気、あつぱれ！ ついでに//コアもくれてやひつ」

「こりぬーよー！」

「貴様、王様になんと言ひ口をー！」

大臣がすかさずキレます。アルスはこのぐだつきもやつたな
……、と思いつつも素直に謝ります。

「『』めんなさい。棒とセツトで渡されたら撲殺してしまったがつたので……」

「うむ、それもそうか。なら代わりにローラをやひつ

「い、……いりません」

アルスは一瞬迷いましたが、父と同じ道を歩むわけにはいきません。あとさりげに大臣がすごい暴言を吐いたな、とも思いました。

結局アルスはドライゴンキラーだけで勘弁してもらいました。

「とはいえたるよ、おぬし一人ではすぐに魔王退治に飽きてしまうかもしだれぬ。街の酒場で仲間を見つけ、これで装備を整えるがよからう」

チャリーン。王様はオーバースローで500ゴールド投げつけてきました。なかなかの強肩です。

「そしてこの部屋にいる兵士に聞けば旅の知識をおしえてくれよ」

ものすじこなげやりです。でもこれは本当にドライゴン王様も言ったセリフなのです。

「では行け、アルスよ！ 魔王を倒してまいれ！」

一方的に王様はアルスを旅立たせようじます。もう王様は眠くなつてきいていたのです。

「はいっ、行つてしまーす！」

アルスは適当にいい返事をして流します。彼はさつと帰つてモ
ンンをやる氣バリバリでした。

彼の当面の敵は魔王ではなくリ レウスになるのかもしません。

仲間を求めます。

アルスはお城を後にすると速攻で帰宅しました。

「母さんただいまー パンダはーー?」

「あら、おかえりなさい。安心して、せつねアマゾンで注文しておいたわ」

「ホントー ホントだよねー!？」

「本当よ。本当だからあの物騒な武器を突きつけるのはやめなさい」

アルスは興奮のあまりドラゴンキラーを母親の喉元に突きつけていました。あわててひっくめます。

「まだ届くまで時間がかかるでしょうから、その間に酒場に行つて仲間を見つけてらっしゃい」

「はあーー」

パンダの「」になるとやたら聞き分けがよくなるアルスは、意気揚々と酒場に向かいました。

酒場についていたアルスは、ナイスバディな受付のお姉さん【せつね】仲間を紹介しても「」にしました。

「ロリ顔で貪乳、ツインテールに一ソックス装備でかわいい系のツンデレ魔女っ子をお願いします。レベルは問いません」

アルスはためらうことなく正直な願望を口にしました。

「うーん、その条件だと三入ね。10歳と16歳と45歳。どれがいいかしら」

アルスは悩みます。

本当はすぐにでも10歳と叫びたかったのですが、彼にも一応勇者としての体裁があります。ロリコン勇者の通り名はまだ荷が重すぎるのです。

それに45歳も逆に見てみたい気がしました。アルスは勇者になつてはじめての壁にぶちあたつたのです。

「じゅ、16歳で」

「あら、そう。ちょっと待つてね。うふ」

妖しげなウインクを一つすると、お姉さんはどこかに魔法電話をかけだしました。

アルスはわくわくしながら待ちます。さながら風俗の待合室気分でした。

「はるー、アルス」

しばりぐしてやつてきたのはアルスの幼馴染のリリアでした。

なるほど言われてみればたしかに条件を満たしてはいますが、彼女はアルスを勇者として、いやときおり人として見ていいようなふしがあります。

同じ年の16歳をえらぶ時点でもしはかんぐるべきでした。

「チョンジで」

ドスッ！

チョンジ「ホールむなしくアルスはおなかに痛みを感じたかと思うと、いつしかその場につづくまつっていました。

さらにもその背中を足で踏まれています。ですが少し興奮しているのも事実です。顔を伏せながらもきわどくひるがえるスカートを盗み見ていました。

そういうえば彼が に田覚めたのものこの子が原因なのかもしれません。

「誰をチョンジだつて？」

「「」「めんなさい。許して。僕はリリアちゃんを危険にさらしたくないんだよ」

と適当な理由をつけます。

いくら彼の性癖にドンピシャだとはいって、やつぱりずっと一緒にいるのはキツイのです。アルスはこれまでに何度も教会送りにされたことでしょうか。

「……あ、あたしだって、あんたが心配でここに登録したんだから。……ツインテールとニーソックスを指名していくと思つて」

さすが、きつちりデレを決めてきます。ですがこの安いツインテレはアルスとしては鼻で笑つてしまつレベルなのです。

「くふつ」

あつと、思わずばかにした笑いが出てしました。

「なに笑つてんのよオラアッ！」

ズシャツ！

アルスの延髄にかかる落しが決まりました。動画にとつておきたいぐらいキレイに決まりました。

アルスは力つきました。

また王様に会います。

「おお、アルスよ、死んでしまつとは情けない」

力つきた勇者アルスの転送先は教会ではなく王様の元になつてしました。アルスはこれから何度このセリフを言われるのか想像しただけで鬱になります。

「聞けば酒場で女子のスカートを覗こうとしたとか。早くも勇者の片鱗を見せてきたようじやな」

周囲から笑い声が聞こえます。

アルスはパンティではなく見えそうで見えないギリギリにこだわったと言いたかったのですが、変態性が増すかもしれなかつたのでやめました。

「さて、アルスが次のレベルになるには、36000ゴールド必要じゃ」

聞いてもいのに王様はかつてにしゃべりだしました。ですがこれぐらいしか仕事がないのです。

「お金取るのかあ……。すごいなあ、汚いおっさんだなあ」

アルスは王様の外道っぷりに感心しています。一人だけ資本主義に走つても、王様ならなにをしても許されるのです。

「アルスはビリからか取り出した盾を田んぼとおりぬ速さでフリスピーとよこ」

王様はビリからか取り出した盾を田んぼとおりぬ速さでフリスピーのように投げつけました。

炎を切つセイく音とともにズガアツとすゞ音がして、盾が柱につきなりります。

アルスは柱にめりこんだそれを引っこ抜きました。なんとクリスマタルの盾です。

これは高い防御力を持ち炎や吹雪にも強く、魔法にも耐性があるとこうすばりしい盾です。

王様のすさまじいシンテレ具合にアルスは強く心を動かされました。

リリアちゃんもこのぐらい見習つて欲しいなあ、とほやきながら、再びアルスはお城を後にしました。

「あっ、アルスー！　だいじょぶだった？」

お城の入り口でリリアがアルスを待ち構えていました。

「まったく、リリアちゃんのせいでハジかいちゃつたじゃないか！」

「『めんね、許して？　怒らないで、おねがい』

リリアは上目づかいにアルスにすりよってきます。いつものパターンですが、アルスはリリアにかわいくお願いされると弱いのです。

なぜならリリアの見た目はとてもかわいいのです。アルスも彼女から学校の男教師の視線が怖いと何度も相談されたことがあります。

「し、しょうがないなあ……。もうホントに氣をつけよね

「ありがと。アルスってやさしくから好きよ」

にこりと笑うリリアにアルスはどきりとします。彼もなんだかんだいってベタなのが好きなのです。

「んでさあ、それなに？ そのキレイな盾

露骨に変わるリリアの態度にアルスはものすごくテンションが落ちました。ですがこれもいつものことなのです。

「」、これは王様にもらったんだよ。これで『僕の』身を守りなさいって

アルスは「僕の」と強調します。あらかじめ自分のものであることをはつきりさせておくのです。

「ふうん。ねえ、ちょっと貸してみてよ

「え、いやだよ

「ちょっと見るだけよ

「だからいやだって」

「貸せ」

「はい」

アルスは盾を献上します。これ以上ねばると手刀が飛んでくるのは過去の経験上あきらかだつたからです。

盾で身を守るのも考えましたが、なぜでしょうアルスの頭にはクリスタルの盾がリリアの打撃によって粉碎される映像が浮かび上がりました。

「うれしいなあ～、アルスがあたしにプレゼントなんて」

アルスはクリスタルの盾を奪われました。ですがこれもまた、いつものことなのです。

再び仲間を求めます。

アルスは仲間集めを再開すべくふたたび酒場へとやつてきました。
こんどはリリアも一緒にです。

「口リ顔で貧乳、かわいい系のシンデレ魔女っ子をお願いします。
レベルは問いません」

アルスはしようとリリアもなく受付のお姉さんにリクエストします。
ですがそれでも彼なりに妥協したのです。

「ねえ、あなた。もう魔法使いが仲間にいるじゃない。それだとパ
ーティのバランスが悪くなっちゃうわよ?」

「僕の仲間はバトルマスターしかいませんけど?」

「誰がバトルマスターだって?」

アルスはリリアに右腕をねじり上げられました。

「あ、さつきの10歳の子をお願いします、10歳の子をー」

ギリギリと締め上げられつつもアルスは叫びます。

「じゃあんなさいね、その子はもうほかのパーティーに入っちゃったか
」

「や、そんなー。」

はじめから素直にそう言つておけばよかつた、と後悔してもすでに後の祭りです。

「10歳の子つてなにかしら？　くわしく聞かせてほしいわねえ！」

「わやあああ！」

人間の腕といつものまゝいもねじれるものなのでしょうか。あたりにアルスの悲鳴がひびきわたります。

「おい、ちよつとうるさいぞ君達！」

見かねて注意したのは勇者カールでした。じつはアルスのほかにも勇者はわりといっぱいいます。

「いくら王様がもうくくしていふとはいえ、さすがにアルスのよくなクソガキ一人に世界の命運を託しているわけではありません。

「あ、」「」「めんなさい。ほらアルス、謝りなさいよ、あなたのせいだしょー！」

「大変申し訳ござりませんでした」

理不尽な要求ですがもうなれっこです。すでにアルスの謝りスキルは一流ホテルの支配人レベルにまで達しています。

「まったく、こつちは遊びでやつてるんじゃないんだよ？　君達みたいな子供はおとなしく家でゲームでもやってなさい」

「はい、やつあるつもつですか」

本当にやつあるつもつだったのでアルスはよじみない返事をしました。

ですがリリアが「それ」とアルスに耳打ちします。

「ちょっと、あんなふうにいわれて悔しくないの？　あんたもやつ勇者になつたんでしょ？」

「せんせん。むじりなんで僕が勇者のかわっぱりわからないし」

「それは、あんたがあのアレルおじさんの息子だからでしょ……」

「……なに？　アレルだと？」

勇者カールがそれを聞きつけます。それビックリコリアの声は酒場中に届いていました。

「あのガキがアレルの……」「おやか……ところどき」「バカな……、信じられん」

部屋中にじよめきがおこり、なにやら雲行きが怪しくなってきました。

そんな中アルスは、PSPがいつ届くのか気になっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7371y/>

勇者アルスくんの冒険

2011年11月23日20時49分発行